

「不肯」の古訓について

大坪 併治

数年前、天理大学 因書館蔵南海寄帰内法伝の訓点(院政初期の)を調査した折、「不肯」について、次のやうな訓例に出合った。

(1) 然其薄絹のまをよ為加沙者とまの、多滑まじり、不肯ふせ著肩おし。礼拝之時遂まは便まは落お地ち。(卷二 9 20)

原文を引用するに際し、ヲコト点は平仮名、仮名訓は片仮名、私意による補説は平仮名を括弧で包んで表はし、反点は後世の形式に改めた。以下同じ。

「肯」は本文になく、「不」と「肯」との間に朱で○印を付し、その右行間にかへニスの訓と共に書き込まれてゐる。ちよつと見ると、かへニスは「肯」の訓のやうに思はれるが、「不」の下やゝ左寄りに熟合の縦線があり、加点者は、「不肯」の二字をかへニスと読んでゐるらしいのである。普通の漢文では、「不肯」は、「肯」を副詞にして、アヘテ——セズ、動詞にして、——スルコト(ヲ)ガヘンゼズと読み、——シカへニスといふことはない。山田孝雄博士の「漢文の訓読によって伝へられたる語法」を繙き、第四十「がへんぜず」の項を読むと、伴信友の「比古婆衣」の説を引用し、ガヘンゼズはかへニセズの音便化したもので、カ

へまたはかへニは、領承の意味を持つ動詞または形容動詞(詞といふ語は用ゐられてゐないが、まうい)であり、本来清音であるが、先行語の意味の説明が加へられてゐる。との接続関係によつて濁音となつたと説かれてゐた。ガヘンゼズの原形がかへニセズであるとすれば、ズは打消の助動詞であらうから、かへニセの終止形かへニスは肯定といふことになる。しかるに、右の寄帰伝の例は否定であつて肯定ではない。同じ語形が肯定・否定両様に用ゐられるとは、一体どういふことなのであらうか。不審に堪へなかつたわたしは、その後、古点本を見ることに、「不肯」の訓に注意して来た。その結果、次のやうな事実を知ることができた。

一、「不肯」の古訓は、アヘズ・タヘズ・キカズ・カヘズ・カヘニス、または音読して不肯ナリ等といひ、カヘニセズといはなかつた。

二、かへニスのスはサ変に活用してゐた。

カヘズ・カヘニスに先行する動詞は連用形であつて、連体形に形式名詞コトを添へた形を用ゐなかつた。

その例、

(2) 羅利復言(はく)、「汝若不能(し)惠(く)我半者(は)、幸願(はく)与我(は)三分之一(は)。」是人不肯(は)、羅利復言(はく)、「若不能者、当

施ニ「手許」。「是人不肯。」(石山大般若涅槃經四卷十一
11-21-22・平安初期の加點と推定)

(3)若都无有^レ人看^レ、衆僧^レ應^レ与^レ瞻^レ病人^一。若不^レ肯者[、]
(この後切り取)^(本)岩淵 願經四分律古点卷三十三 29-25) キカズハ

(4)、朱虚侯^レ奪^レ節^一。謁者^レ不肯^一。(毛利 呂后本紀延久五年点
・古典複製本 12ウ)

(5)莒人不^レ肯^一。(春秋經伝集解保延五年点・同複製本 13オ)

(6)若肯^ズ(不)ハ、則チ施ス心カラズ(不)。(聖語 菩薩著戒經古
点・春日政治博士著「古訓点の研究」二八九頁による)

(7)有^ニ数人不^レ肯^レ去^レ兵^一。(毛利 呂后本紀延久五年点・古典複製
本 14オ)

(8)味^ニ中^レ肉^レ飽^レ、不^レ肯^レ搏^一。(神田 白氏文集天永四年点
同複製本 22オ)

(9)彼 比丘尼随^レ順^一。「(原本「順」を「順」に作る)言教^ニ、不^レ敢^レ違^レ逆^一。乞^ニ
解羯磨^一。彼不^レ肯^レ解^一。(斯道文 願經四分律古点 6 15)

(10)肯(ニ)不(ル)者(ハ)具(ニ)進^レ不^レ有^一。(不肯者具有進不、
松田 四分律行事抄古点・中田祝夫氏著「古点本の国語学的研
究」八九四頁による)

(11)我 所説^レ法^一不^レ肯^レ信^一受^一。壞^ニ率堵坡及諸^ノ寺舍^一。(東大
地蔵十輪經元慶七年点・卷四 13)

(12)此 記^ニ(略中)財帛猶^レ不^レ肯^レ博^一也。(東大
古点 46 12・平安初期の加點と推定)

(13)以下八地中得^ニ无^レ相^一行^一、就^ニ着^レ杼^一、不^レ肯^レ進^レ修^一。
(同、10 19-20)

(14)中途^レ遇^レ仏、不^レ肯^レ修^レ大^レ化^一以^ニ二^一乘^一。
(石山 妙法蓮華經玄贊卷六 33-4・天曆前後の加點と推定)

(15)見^レ不^レ肯^レ修^レ二^一大^レ乘^一、方便^レ化^一以^ニ二^一乘^一。
(同、33 21)

(16)法師不^レ肯^レ居^一前^一。(聖福
学教養学部人文科学紀要第九輯・国文学漢文学Ⅱ所収 築島
裕氏「興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝古点」五五頁による。院
政期の加點の由)

(17)不肯^レ給^レ馬^一。(同)

(18)父帝却^レ之^一、不^レ肯^レ乘^レ千里馬^一夫漢道興^一。(神田
白氏文集天永四年点・古典複製本 5ウ)

99 記^ニ(略中)俗書 猶^レ不^レ肯^一。(東大 百法頭幽抄古点・
57 14-15)

右の内、カヘニス例 (9)―(15)について若干の説明を加へる。
まづ(9)の「解」の右には三字の仮名があり、春日政治博士はキア
へと見、解キアヘズと読まれた(古点本の研究一六六頁)が、ア
はカとも見られる曖昧な字体であり、「解」にはなほ右肩に二の
ヲコト点があつて、解キアヘニスまたは解キカヘニスと読むべき
ものらしい。博士によれば、聖語蔵の他巻に「彼説クニ肯^ハヘズ
(不)」の例があり、また大矢透博士の「願經四分律古点」に引か
れた「若不^レ肯^一者」は、移点された仮名を見ると、「肯」

の右にカへの二字があり、カヘズハと読むべきものと思はれるから、今の場合も、アヘニスよりはカヘニスの方が穩当ではないか。

(10)は、文面によると、「不肯」の右にカヘニセシの仮名があり、さらに「肯」にニの点が、「不」にルの点が打たれてゐるやうである。中田氏はこれを何と読まれたか知らないが、もし、カヘニセシニアラザルヒトと読まれたのであれば、複雑過ぎて意味が通りにくい。わたしの大胆な想像では、仮名とラコト点とは別々に読むべきものであり、仮名によればカヘニセシ、ラコト点に拠ればカヘニスル。前者はカヘニスの未然形に過去の助動詞キの連体形の接続したもので過去、後者はカヘニスの連体形で現在を表はしてゐるやうだ。前後の關係が不明で、この場合どちらが適切であるか分らないが、初め現在に読み、後過去に読み改めたのではないか。

(11)は、先に南海寄帰伝の訓点を紹介した際(島大編纂、人文科学第五号所収)に引用し、「付訓が不十分でよみ方が判然しない。カヘニセザラムか。」と書いておいたが、正しくは本稿の如く読むべきものであった。誤読の原因は、「不」の中央に加へられたラコト点の+をムと解した結果である(大矢透博士の「地蔵十輪經元露点」にはムトス。中田祝夫氏の「古にカヘニセ(ヘニセ)」が、+は下の「壞」にも施されてをり、他にも多くの例があつて、セムと読むべき点であつた。このほど東大寺本六巻を読み返し、やうやくそのことに気付いた仕末で、全く慚愧に堪へない。即ち、本例は、「肯」の右のカヘニの仮名と合せ、信受シカヘニセムと読むべき、完全な表記だったのである。

(12)(13)(14)は、肝腎の「肯」に訓がないが、それぞれ博カヘニ

スルヲ・進ミ修シカヘニスルヲ・修シカヘニセシカバ・修シカヘニスルヲと読むことは動かないであらう。

上記の諸例によつて、平安最初期から中期初頭にかけて、「不肯」にカヘニスの訓の行はれてゐたことが分つた。南海寄帰伝の例は、実にこの古訓を院政期まで伝へたものであり、「肯」の右のカヘニスを「不肯」二字の訓と見たわたしの解説は正しかったのである。

二

ところで、カヘニスの構造が問題である。まづカヘニスをカヘズと同義に用ゐるのを見ると、カヘは共通な動詞(下二段活用)であらう。

次に、カヘズのズは終止形の例しかないが、恐らく打消の助動詞と思はれるから、カヘニスの場合、ズに相当するものはニスである。しかるに、スはサ変に活用してをり、打消の助動詞ではなく、否定の意味はニにあると見なければならぬ。ニが否定の意味を持つとすれば、上代に存した打消の助動詞ヌの連用形ニの残存といふことになる。即ち、カヘズは、動詞カヘに打消の助動詞ズが接続したものであるに對し、カヘニスは、カヘに打消の助動詞ヌの連用形ニが接続し、さらにサ変動詞が付加したものと推定される。

さて、動詞のカヘであるが、「不肯」を別にアヘズとも読むのを見ると、カヘズはアヘズと何か關係がありさうだ。即ち、カヘズはこのアヘズの転訛したものであり、それには上代に存した同じ不可能を表はす語、カヌ・カテヌ等の影響があるのではない

か。カヌは不可能を示す動詞（下二段活用）で、平安時代以後も和歌・散文共に用ゐられ、そのまゝ現代口語に引き継がれるが、訓点語には初から用ゐられなかつた。カテヌは、可能を表はす動詞（下二段活用）カッの未然形に打消の助動詞ヌの接続したもので、未然形カテナ（ク）、連用形カテニ、連体形カテヌ、已然形カテネといひ、連用形はさらにサ変動詞に続いて、カテニスともいった。カテニは、平安時代に入つて後も、和歌・散文共に用ゐられ、カテニスは、和歌に限つて用ゐられたやうであるが、これまた訓点語には絶えてその例を見ない。

○春されば吾家の里の川とには年魚こさ走る君待ち我^{カテニ}爾^{カテニ}（万葉集巻五・八五九）

○鶯の待ち^{カテニ}迎^{カテニ}勢^{カテニ}斯梅が花散らずありこそ思ふ児がため（同巻五・八四五）

○夜や暗き道やまとへるほととぎすわが宿をしも過ぎかてに鳴く（古今集夏・紀友師）

○桜散る花のところは春ながら雪ぞ降りつゝ消えかてにする（同春下・そうく法師）

○出でかてに御手を取らへて、やすらひ給へる、いみじうなつかし。（源氏物語・賢木）

カヌ・カテヌが訓点語に伝承されなかつたのは、不可能を表はす他の語、——コト得ズ・——コト能ハズ等がこれに代つたためであらうが、同時に、アヘズと交錯して、カヘズ・カヘニスの中に没入して了つたことにもよるのではあるまいか。カヘズ・カヘニスの関係は、カテヌ・カテニスの関係に対応してをり、カヘニスの複雑な構造も、カテニスに学んだものと見れば、容易に説明が

つくと思ふのである。

カヘズ・カヘニスのカヘを、このやうな混淆の所産と見るならば、その終止形と推定されるカフといふ独立動詞は、探しても求められないことになる。山田孝雄博士は、前記著書の中で、流布本日本霊異記上第五話の訓釈に、「^{カヘ}諾奈利」とあるのに注意し、カヘニは形容動詞カヘナリの連用形であらうとされたが、興福寺本を見ると、「^{カヘ}諾奈利」とあつて、博士の説は成立しない。

カヘは、その語源から推定されるやうに、本来清音だつたはずであるが、カテヌ・カテニスも、奈良時代すでに濁音化する傾向を生じてゐたといふ（^{カヘ}万葉集巻一・三六一頁）から、先行音との連濁現象も手伝つて、やがてガへと濁音に発音されるやうになつたと思はれる。動詞を承けないで、単独で用ゐられるカヘズ・カヘニスは、濁音が語頭に来ることを好まない一般的傾向に従つて、かなり後まで清音を保つてゐたはずであるが、これも、院政時代には、やはり濁音になつてゐたと見え、^{カヘ}観智類聚名義抄には、「不肯」をカヘスとよみ、カに濁点を打つてゐる。

三

私見では、このカヘニスが後のガヘンゼズになつたと思ふのであるが、それでは、いつどのやうな経路を経てガヘンゼズに變じたのであらうか。

まづ第一に考へられることは、カヘニスのニの音便化によるカヘンズの成立である。サ行に続くニが撥音化することは、中期の初には、始めてゐたといはれ、土佐日記の「しし子かほよかりき」の「しし」を、「死にし」の撥音化した「死ンジ」のンの零表

記と見ることは、殆んど学界の定説であり、ヤム降って石山法華義疏長保四年点には、「何為」にナスレソと付訓した例がある。

だから、カヘニスも、中期にはすでにカヘンズとなつてゐたかも知れないが、これを資料的に実証することは困難である。なぜなら、カヘンズの場合、ンが零表記となれば、本来のカヘズと同じ

になつて、その区別が付かないからである。カヘンズがカヘズと異つた撥音であることを確認するためには、ンが零表記でなく、

特殊な記号、例へば、<・>・・・・・・ン等によつて示された例を求めなければならぬ。しかるに、遠藤嘉基博士によれば、国語の

撥音表記に特殊な記号を用ゐるのは、高野山電妙法蓮華經の明算点光院本

(天香・康平頃)に始まるといふ(調点資料と調点語)から、目指す表記例は、

末期にならなければ求めがたい。山田孝雄博士の前記著書には、西大大毗盧遮那成仏經承暦二年点及び醍醐大毗盧遮那成仏經疏建

保五年点(点)から、共に「不肯カヘニス」の例が引かれてゐる(前者の例は、わたしの調べたところでは、どういふものか見付

らなかつた。この經の朱点には二種あり、一つは承暦二年の加点点であるが、他はずつと後のものである。)わたしは、院政期以後

の点本については、殆んど調査らしい調査をしてゐないので、わたしの求めえたカヘンズの例は、ずつと後の真福寺本遊仙窟の付訓である。

例俱 (カヘニス) 不肯先 (カヘニス) 坐 二

例十娘又~~不~~肯。

右は、初め平井秀文氏の「真福遊仙窟訳文稿」(福岡学芸大)を読んで教へられ、後貞原書複製本によつて確かめたものである。

さて、カヘニスがカヘンズとなると、こゝに厄介な問題が起きて来た。撥音便の内、ニ・リ等の転じた撥音(死に $\sqrt{\text{死}}\text{ンジ}$ ・盛りなり $\sqrt{\text{盛}}\text{ンナリ}$)は、本来[m]音で、ビ・ミ等の転じた撥音(噎びて $\sqrt{\text{噎}}\text{ンデ}$ ・摘みたる $\sqrt{\text{摘}}\text{ンダル}$)は[m]音であり、中期あたりまでは、前者は零表記、後者は仮名のムで書き分けられてゐた

が、次第にその区別が乱れ初め、遠藤博士によれば、前記明算点では、[m]共に $\sqrt{\text{}}\text{}$ で示した「喪ホロヒン」「少壮サカ $\sqrt{\text{}}\text{}$ なる」等の例が見える由。この傾向は、時と共に甚しくなつていつたから、カヘンズの場合も、他のマ行四段活用動詞の連用形がサ変動

詞に接続し、次いで撥音化した複合語、例へば、甘ズズ・輕ズズ等と、音韻上の区別を失ふに到つたはずである。さて音韻の区別

を失ふと、甘ズズ・輕ズズ等のやうな肯定の意味を持つ語との形態的区別がなくなり、カヘンズの持つてゐた否定の意味が次第に

薄れ、肯定と誤られる危険を生じて来る。古典全集所収十卷本伊呂波字類抄に、「肯 $\sqrt{\text{カヘンズ}}$ 」とあるのは、当時、カヘンズが、「肯」

の訓として、ウケカフと共に、肯定の意味に理解されてゐたことを示すものである。

このやうに、カヘンズの否定の意味が稀薄になり、肯定と誤られるやうになつた結果、何らかの方法によつてこれを強化する必要が生じ、カヘンズの未然形に、さらに打消の助動詞ズを加へ、

カヘンゼスとしたのであるまいか。その時期がいつであつたか分らないが(恐らく過渡期においては、両者が併用されてゐたであらう)、醍醐寺本遊仙窟を見ると、真福寺本でカヘンズと読まれてゐた

のが、すべてカヘンゼスとなつてゐる。

例十娘見~~不~~肯。讀~~不~~欲~~不~~燒却~~不~~。

例十娘見~~不~~肯。讀~~不~~欲~~不~~燒却~~不~~。

例十娘見~~不~~肯。讀~~不~~欲~~不~~燒却~~不~~。

例十娘見~~不~~肯。讀~~不~~欲~~不~~燒却~~不~~。

②各自相讓オノオノ 俱トモ 不レ情オホシニ先マ坐マ。

③並ニ不レ情オホシニ先マ捉ト。

④必ニ不レ情オホシニ先マ捉ト。

カヘンズがカヘンゼズとなるのに並行して、今一つ、文法上注目すべき変化が生じた。それは、これまで動詞の連用形を承けて、——シガヘンズといつてゐたのが、「不得・不能」等の類推によるのであらうか、動詞の連体形に形式名詞トを添へたものを承けるやうになつて、——スルコトガヘンゼズとなつたことである。例へば、(9)と凶とを比較してみると、(9)は先オホシ(ダチ)テ坐ガヘンズであるが、凶は先オホシ坐ルコトガヘムゼ(ズ)である。真福寺本と醍醐寺本とは、共に鎌倉末期の写本でありながら、一方が古い語法に従ひ、他方が新しい語法に拠つてゐることは、比較研究上面白い対照である。ところで、凶は、「不肯」の訓はカヘニス、動詞は居スルコトヲで、新旧二様の訓が混淆してゐる。(10)を、築島氏は、やはりカヘニスと読むべきものとされたが、もしさうだとすれば、この方は給ヒカヘニスで、完全に古訓に従つてゐるわけであり、同じ資料で、同じ点者が、新旧両訓を併用してゐるといふことになる。訓点語には、初からさうした傾向があつたやうであるが、院政期になつて、言文二途に岐れ、訓点語と日常口語との乖離が甚だしくなるに連れ、その傾向が一層著しくなつたのであり、三藏法師伝古点に見えるものは、実は院政期の訓点資料全般についていひ得ることなのであらう。さて、上述したところを纏めると、次の如くならうか。

— シ・カヘズ
— アヘズ
— カテス
— シ・カヘズ
— シ・カヘニス
— シ・ガヘンズ

スルコト・ガヘンゼズ

追記一、本稿は、昭和三十二年十一月十六日、東京大学で開かれた、国語学会研究発表会で口述した原稿に、若干の修正を加へたものである。

二、カヘニスにニの打消の助動詞ヌの連用形、スをサ変動詞と見ることは、訓点語と訓点資料第六輯所収拙稿寺山妙法蓮華經玄贊卷六の訓点の中で言及したが、その後もなく、築島裕氏も前記「三藏法師伝古点」で、同じ考へを述べられた。

三、国語学会で、カヘニスの構造に関し、幾つかの有益な御質問や御意見を承ることができた。その一、「打消の助動詞ヌの連用形ニは、上代においてさへ、カテニ又はカテニスに限られる傾向があつた。しかるに、平安時代に入つて、更に他語と複合して、カヘニスといふ新語を作り得たであらうか。」これに対して、わたしは次のやうに考へる。ニがカヘヤサ変と新たに複合してカヘニスとなつたのではなく、古くからあつたアヘズ・カヌ・カテニス等が混淆してカヘニスになつたのであるから、ニ自体の消長とは、一応切り離して見ることができる。

四、その二、「先キンズの語源先キニスと同様に、カヘは名詞、ニは助詞とは見られないか。万葉集の『親はさくれど吾はさかるがへ』(巻十四・三四二〇)のガヘとは関係はないだらうか。」先キニス√先キンズの例は、わたしも一応考へた。たゞし、カヘズ・カヘニスに先行する動詞は、連用形を取つてゐるから、カヘは用言性のものでなければ

ならない。万葉集のガヘが何かよく分らないが、すべて連
体形を承けてをり、接続が違ふ。

五、その三、「カヘズ・カヘニス」の構造をそのやうに考へた
場合、拾遺集の『はし鷹のとかへる山の椎柴のはかへはす
とも君はかへせじ』（卷十九・雜恋・題知らず・読人知ら
ず）のカヘセジは、何と説明されるだらう。」わたしは、
カヘズ・カヘニスは、訓点語にのみ用ゐられたものと思つ
てゐた。拾遺集のカヘセジが、これに関係ありとすれば、
極めて注目すべき例であるが、肝腎の歌意が不明で、カヘ
セジが「不肯」の義かどうか判然しないのが残念である。

昭和三十二年十二月二十二日稿了

——島根大学助教授——